

館務実習から＝



丸太を移動させる [がんだ] の使い方

**資** 料館では8月17～19日、9月22～24日の2期にわたり、40名の岩手大学生が学芸員の資格を習得するために必要な館務実習を行いました。

主な実習内容は資料館の基本的な作業である資料整理作業と聞き取り調査です。中でも聞き取り調査では石曾根勝雄さん(江繋)、佐々木富治さん、芳門千次郎さん(川内)、高屋喜多男さん(小国)、館向寿人さん、茶畑丑之助さん(門馬)にご

協力いただきました。資料台帳を作成する必要から、寄贈していただいた資料を、館内で実際に見ながらお話を伺いました。協力してくださった方々は、時折り実演もまじえながら、資料1点1点について使用方法や製作方法を詳しく教えて下さいました。合計120点の資料についてお話を伺うことができました。成果は、「資料紹介」などでお知らせしていく予定です。



[よこだ] の背負い方

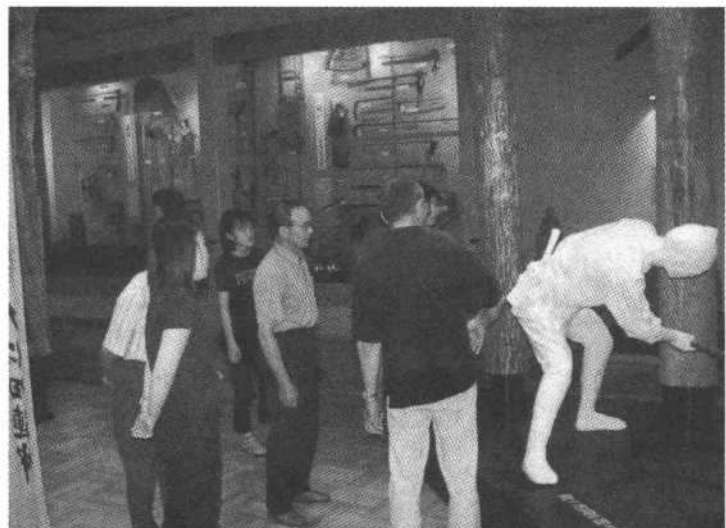


いろいろな種類の[のこ]があります

資料館を見学して…実習生の感想

- \* 数多くの資料に圧倒された。
- \* 柱にひび割れが見られたが、空調はどうなっているのか資料の保管が心配だ。
- \* 展示してある古文書に解説が少なく、分かり難い。他の資料にももっと分かりやすく見やすい解説を付けてほしい。
- \* 木の良い香りがした。小さいながらも良い雰囲気資料館だと感じた。
- \* 写真や映像で見せる展示が、もっとあれば良いと思う。体験や実演のスペースも必要ではないか。

※なかなか厳しい意見もありますが、改善できるところは努力していきたいと思ひます。



## 調査記録の紹介



畑踏み (門馬:茶畑ミヤさん)

まだ遠くの山に雪が残っている頃に行われます。この写真は8月のソバ蒔きのころ、「春早いうちにこうやって畑踏みをしたもんだ」といって再現して下さったときの様子です。

**民** 俗資料館では、川井村内で見られる暮らしや仕事のさまざまな場面で行われている昔ながらの風景あるいはその再現を写真やビデオに収め、お話を伺い、記録として残しています。

今年度も、村内の方々にご協力いただき、機織り、真綿かけ、ひ草刈り、穀物栽培、食生活などにかかわる一連の作業について記録をとらせていただいております。今回はその中から収穫の秋を終えたばかりの「穀物」について、記録のごく一部を紹介します。



①「きっかけ」(土寄せ)作業 (6月中旬)

これからどんどん伸びるヒエが倒れないように、[鎌]で土を寄せ、畝を高くします。

茶畑さんが使用している[鋤(すき)](写真左)についてお話を伺いました。

### 《材質》

\*ホオノキ材(1日引張って歩くから、軽い材がよかった)

### 《製作、使用方法》

\*[鋤がら(柄を含めた本体)]の高さは使う人に合わせて作る。木の幹と枝の形をうまく利用し、土にささる部分が「もと(根)」、足で踏み込む部分が「うら(梢)」の方向になる。[鋤がら]の先に[鋤がらの金]を取り付ける。

\*この[鋤がらの金]の部分を右足で踏み込んで畑に突き刺し、柄を倒すようにして左側に土を返す。足を変えて左右交互に行う。

\*ご飯を盛るような[鋤べら]を腰にさしておき、[鋤]の底部についた土を払い落とす。[鋤べら]は毎年作る。

\*畑の傾斜の上の方に向かって起こしていき、下りは[鋤]を背負って下りてくる。畑踏み作業は疲れるので、このときひと休みを兼ねる。

\*畑が広いので6、7人の「組っこ」で協力して作業をした。

## ヒエ栽培の記録

高齢者中央学園専門講座伝統的食文化伝承活動

記録：道又キヨさん(小国)

・6月6日 ヒエ蒔き(昔より少し遅いスタート)

・6月16日 この頃芽が出始める。葉が3枚程度出たところで「抜きたて」、次いで「きっかけ」作業をする。

・8月6日 この頃から穂が出始め、8月末に実が入り始めた。

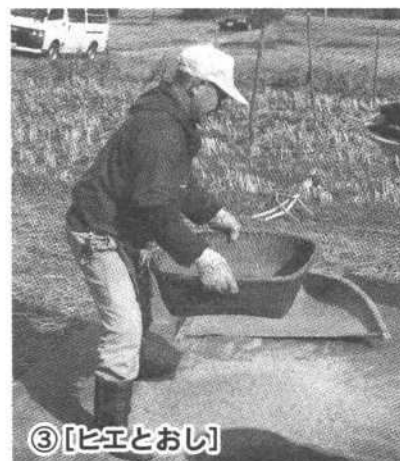
・9月19日 ヒエ刈り。乾燥させるために「しま立て」をする(14しま)。

・10月22日 ヒエ打ち。2斗4升の収穫。



②ヒエしま(9月19日)

刈り取ったヒエをおよそ1ヶ月かけて乾燥させます。



③[ヒエとおし]

・乾燥させたヒエ束の穂の部分に板を打ちつけて実を落とします。「頭打ち」作業。穂に残った実はさらに「まどり」で打ってきれいにはずします。

・はずした実には葉や莖も混ざっているため[ヒエとおし]を使ってヒエとごみをふるい分けします。[ヒエとおし]にはゴミが残り、ヒエ粒は下に落ちます。

・次にヒエ粒をすくって[唐箕(とうみ)]にかけます。風の力で細かいゴミや実入りの悪いヒエと、しっかり実が入ったヒエをより分けします。[唐箕]の他に[箕(み)]も使用します。より分けた実は袋に入れて運びます。





⑤タカキミ乾燥準備：川井地区公民館寿大学  
(記録：戸草ハツさん)



④アワ穂8栽培者／高屋喜多男さん(小国)

どんどん取材したいので、情報をお寄せ  
ください。ご協力をお願いいたします。



④ソバしま

高齢者中央学園専門講座伝統的食文化伝承講座  
(記録：道又キヨさん) 後ろに見えるのは前出のヒエしま

## 14年度企画展のお知らせ

**14**年度は、生活や仕事を支えてきた民俗資料の「製作技術の伝承」をテーマに企画展を行います。使い手に合わせた手作りの民俗資料について、材料の準備から製品完成までの一連の作業に必要な用具を紹介する他、あわせてパネル展示でその製作過程を図解し、写真記録を紹介します。実演や体験コーナーも考えています。この企画展を通して、伝統的な製作技術を現代に生かすことを考える一助となれば幸いです。

## 国指定に向けた作業について

これまでの資料館だよりも何度か触れてきましたが、現在、民俗資料館では民俗資料の国指定に向けた作業を進めております。

村内の皆様にご協力いただいて数多く集められた資料を、ぜひ国指定にというお話をいただいてから、指定の際に必要な民俗資料台帳を作製する作業を進めてきました。資料台帳とは民俗資料1点1点について写真、実測図、バックデータが整った民俗資料カードのことです。台帳整備は国指定のためにも必要ですが、資料館として必ず行わなくてはならない基本的な仕事です。

暮らしや生活に密着した民俗資料について、実際に使ったり見たりしたことのある方々から、直接お話しを伺って整えられた資料台帳は、川井村の暮らしや仕事の歴史を明らかにする、村民の大切な財産となります。村内の皆様にご協力いただいた聞き取り調査の情報を基に、正確な内容の民俗資料台帳を作りたいと、スタッフ一同がんばっております。

**報  
告**

## 民俗資料の 害虫防除について

全館燻蒸期間12月12日～17日

民俗資料館では2年に1度全館燻蒸を行って、村内の皆様から寄贈して頂いた貴重な資料を虫やカビの害から守っています。しかし燻蒸期間が終了してしまうと再び虫やカビが発生する環境となります。そのため資料館では防虫剤や乾燥剤を用いて、燻蒸後も日常的に資料を虫やカビの害から守る管理を行っています。

**来館者より** ●生活を支えてきた民具の数々に  
圧倒されました。願わくばそれぞ  
れの寄贈者にどんな状況で使われていたのか、昔話  
を伺いたいものです。もし村民講座などある時はご  
案内いただけないでしょうか。(9/23盛岡市から)

●盛岡へ行く途中通りがかりに立ち寄りしました。ヒノ  
キの香りがとっても良かったと思います。

(5/12宮城県から)

●学校の研修で寄りました。昔の道具がいっぱいあつ  
てとても楽しかったです。(5/10新里村から)

資料館の周りの植物  
「館長のこころ」コーナー  
はお休みします

単位：人

4月～9月までの来館者数

	個人			団体			合計
	一般	学生	児童	一般	学生	児童	
4月	70	2	7	16	0	0	95
5月	113	1	16	80	23	15	248
6月	60	9	0	124	0	6	199
7月	54	2	13	163	0	0	232
8月	161	7	20	46	19	20	273
9月	143	1	33	50	21	20	268
合計	601	22	89	479	63	61	1,315

2、3ページで紹介した[鋤]と[ヒエとおし]を紹介します。

作図者

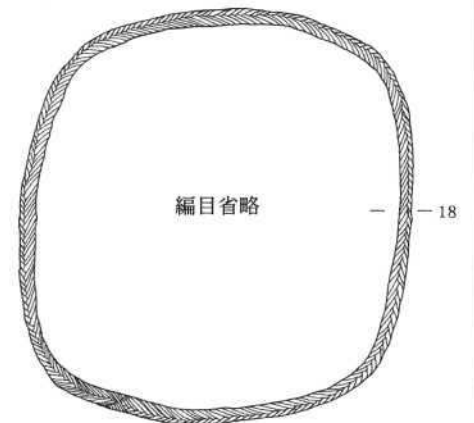
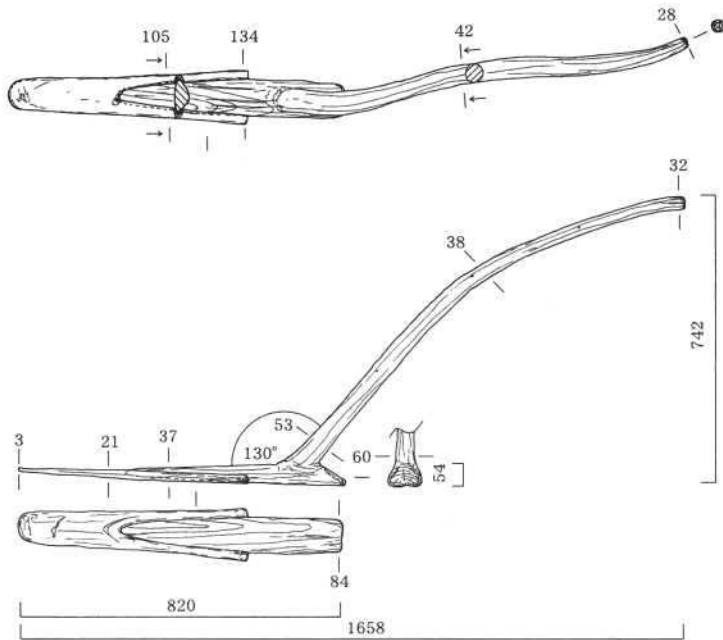
野沢 裕美

伝票番号 1413  
 資料呼び名 鋤(すき)  
 寄贈者 芳門千次郎氏  
 収集者 芳門留次郎氏  
 話者 芳門千次郎氏  
 材 料 不明

製作方法 金属部分は地元(川内区)の農鍛冶  
 使用者 男女問わず  
 使用年代 芳門菊松氏の代から  
 使用場所 畑  
 使用方法 春畑を起こすとき使用。鋤踏みをするとき話者の家では7人が並んで少しずつテンポをずらして前後の人が邪魔にならぬように踏んだ。

備考 鋤の先の金属部分は現在の長さの倍以上あった。使用するうちに磨り減った。  
 斜面の下から上へ前年のうね幅を目印に鋤踏みをするが、急な斜面の方が腰を曲げなくて良いため楽だった。  
 早く終わらせようとして「鋤先を残して(間隔をあけて踏むこと)」踏めば後で[鍬]を用いて耕すとき硬い土が残った。

調査年月日 平成13年9月23日  
 調査者 安田美紗(岩手大学学生)



作図者

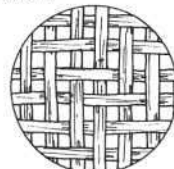
野沢 裕美

伝票番号 2032  
 資料呼び名 アワとおし  
 寄贈者 高森清志氏  
 収集者 高屋喜多男氏  
 話者 高森清志氏  
 材 料 ニガタケ  
 製作方法 製品を購入した。  
 使用者 高森清志  
 使用年代 昭和22、3年頃まで  
 使用場所 家の土間やにわ  
 使用方法 当て板(120×60cmの厚めの板)にぶつけて「から(茎)」からはずしたアワの実を[アワとおし]に入れて篩い、実とゴミを分ける。残ったゴミは捨てて、下に敷いた[むしろ]に落ちた実は[唐箕]にかける。

備考 他にダイズ用(No.2030)、ヒエ用(No.2031)の[とおし]がある。

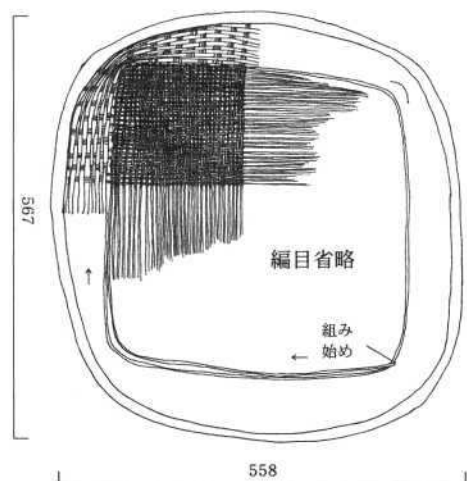
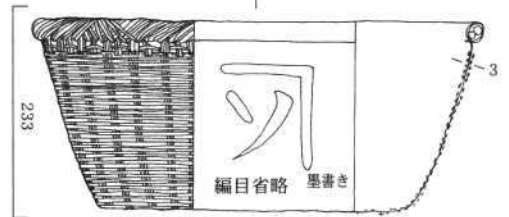
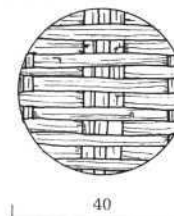
調査年月日 平成12年7月29日  
 調査者 岡田華那(岩手大学学生)

A (底面)



材の太さ 3~4mm  
 目の大きさ 3~5mm

B (側面)



作図者観察点

竹の節が内側にくるように組んである。